



ジェームズ・ボンドを生んだ作家 イアン・フレミング 〈後編〉

■〈前編のあらすじ〉伝統や秩序に縛られることを嫌い、また過干渉な母と優秀な兄へのストレスから多くの女性と「カジュアルな関係」を築き進んでいたフレミング。ロイター通信社にコネ入社するも、母の説得に負けて家業の銀行マンに転職。その不満や鬱憤から女遊びは激しくなり、ギャンブルや豪遊に明け暮れるようになる。そうした中で第二次世界大戦が勃発、国の機密情報を扱う英海軍諜報部に勤務することになり……。25作目となるシリーズ最新作「007／ノー・タイム・トゥ・ダイ (No Time to Die)」の映画公開を記念し、自身をモデルにしたと言われるスパイ、ジェームズ・ボンド誕生の秘密に迫る。

諜報部員として大活躍

ジェームズ・ボンドの上司「M」のモデルになったと言われる海軍諜報部の部長、ジョン・ゴドフリー提督の私設秘書に抜擢されたフレミングは、自慢の想像力と計画力、情報収集力、伝達力、そして何より語学力を存分に振るいながら、これまでの怠惰な生活が嘘のように活き活きと様々なスパイ活動を企てていった。

ボンドのように実際に現地に赴いて



© Michael Coppins

ホースガーズパレードの隣に建つ、旧英海軍本部。この中に諜報部 (Naval Intelligence Division) も設けられていた。



© Laurie Nevay

通称 MI6 で知られる、現在の英秘密情報部 (Secret Intelligence Service / SIS) の建物。映画「007／スカイフォール」では爆破されるシーンが話題となった。

任務を行うスパイ (Secret agent) ではなかったものの、指揮官として諜報部隊を統括。たとえば、サンデー・タイムズ紙の海外特派員になりすましたスパイ部隊を情報収集のために諸外国へ送り込んだり、「30AU (30 Assault Unit) (通称レッド・インディアンズ、設立当初30人だったが終戦時には450人になっていた)」と呼ばれる、金庫破りや錠前破り、盗聴などを専門とする奇襲補助部隊をまとめた。とくに、この「30AU」は第二次世界大戦において大活躍し、結果的に英連合軍を勝利に導いた「D-Day」でも多大な貢献を果たしている。この時に企てた陰謀や特別任務は小説の中に散りばめられており、諜報部員としての経験なしにボンド小説は生まれ得なかったと言っている。

ほかに、フレミングが考案した任務は直前で決行が中止されたものも含めて多数あり、ナチスドイツのコードブック (暗号解読本) を盗むための特別任務「Operation Ruthless」(ドイツ軍の戦闘機を海上に撃ち落とし、負傷したように見せかけた偽ドイツ兵の諜報部員をもぐり込ませた後、救助にやってきた掃海艇のドイツ兵を皆殺しにして軍艦内にあるコードブックを盗む作戦)、スペインが英国の敵側として参戦した場合に英領ジブラルタルを封鎖する作戦「Operation Goldeneye」

